

シカゴより近況報告 – 「苦い小さな杯」

「ええっ、喉に小さなシクリ？ それに脾臓もはれて...。」 静かな秋雨に煙る午後、市のクリニックで定期検診をうけた久子は、担当医師に体内の異常をつけられ一瞬言葉を失いました。まさか、でも服用を中止した甲状腺ホルモン錠のせいかも知れないと不安そうな表情をみせる久子に医師は言葉をつづけました。「そんなに心配はいりませんが、とりあえず血液検査をしましょう。総合病院でも精密検査をうけてください。」 医者の見立ては「リンパ節腫瘍(Lymphoma)」という病名で、体内をくまなくX線断層写真や生検などで精密検査をしたあとに最適の処置を考えたいということでした。

医者の判断は誤りではありませんでした。一ヶ月にわたるさまざまな検査のあと、久子は生まれてはじめてアメリカで化学療法をうけることになりました。幸い専門クリニックは家のすぐ近くで、旅客機のファーストクラス並みの椅子にゆったりともたれた久子は腕にさされた静脈注射の針から体内に点滴をゆっくりと流しこまれて六時間。一回目の治療が無事おわりました。ところが一週間たって体調がおもわしくなくなり、総合病院のER(緊急治療室)に直行したところ、そのまま入院。体内の白血球、ナトリウム、カリウムなどの数値が低下していたのです。担当医師の指示で静脈注射、経口投薬、食事療法を五日間続けた結果、なんとか体力を持ち直すことができ、ちょうど感謝祭の日(11月27日)に退院できたばかりです。

感謝祭は、アメリカ建国物語にまつわる祝祭日で、その由来は1620年にさかのぼります。当時、メイフラワー号で大西洋を横断した104人の「ピルグリム・ファーザーズ(旅人の始祖)」たちは、新天地に上陸できたものの、寒い冬と壊血病のために半数以上がその年に死んでしまいます。けれども翌年には近くのインディアン(先住民)から教わったトウモロコシが根づき、秋にはみんなが越冬できるだけの食料も収穫できたので、野生の七面鳥をとらえて晩餐にならべます。インディアンも射止めた鹿をもってこれに加わって、白人とインディアンの最初の交歓がおこなわれ、収穫を感謝する祈りがささげられたのです。これが起源となつて、11月の第4木曜日は全米で感謝祭を祝い、家庭では七面鳥料理を食べる習慣となっているのです。病院では思うような食事ができなかったせいもあって、帰宅した久子はひさしぶりの肉料理に舌鼓を打っていました。まだ数値は平常ではありませんが、適切な食事、運動などによる健康管理をしながら回復をめざしているところです。



入院中はさまざまな人たちとの出会いがありました。さすが合衆国というだけあって人種の多様性にも驚きましたが、そのひとりびとりが与えられた仕事に誇りと責任をもってきびきびと働いている姿は印象的でした。「今晚はわたしが面倒をみます」と訛りのある英語で病室に入るやいなや笑顔で自己紹介をした小柄なカティさんはフィリピン人。部屋を掃除にくるシャンタさんはインド人。農場を経営していた夫が亡くなってアメリカに移住して30年。ヒンズー教徒なので肉は禁制とあってカレーの話は残念ながらできませんでした。採血にきたエルサレム生まれの準看護師は、祖国に残っている家族を心配しながら紛争が長引いていることを嘆いていました。長い眉毛につぶらな瞳のビューヌさんはイラン人。将来はときどき、恵まれない国での医療奉仕に生涯をささげたいと言う答えがかえってきました。血圧を測りながら久子の読んでいた本の漢字に興味をしめしたダイアナさんは、両親が中国で働いていた宣教師。久子の手をとって歩行訓練で廊下を一周したミシェルさんは、叔父がエクアドル人で現在は首都キトにある教会の牧師をしているということでした。私たちが出席している教会からは、音楽担当のジョーンズ牧師が見舞いにきてくださいました。聖歌隊のメンバーがいつも祈っていて下さり感謝しています。

「なぜ、自分がこんな目にあわなくてはならないのか」このような境遇におかれることは誰でもあります。突然の病いもそのひとつです。原因が思い当たらない場合は、なおさら苦しみや痛みのなかで「なぜ」をくりかえします。その実、本当の答えは「なぜ」のなかにはなく、「そのあとに何かある」という期待に見出されなければならないのです。その意味では苦しみは前奏曲といえます。ゲッセマネの園でイエスは死を前に「この苦い杯を取りたまえ」と血の汗をしたたせながら父なる神に答えをもとめます。また不当な裁判による十字架の極刑をうけながら、「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」と最後の問いかけをします。しかし、そのときも答えはかえってきませんでした。ところが、イエスの苦しみを通して一つだけはっきりしていることがあります。それは、この苦しみによって神が全人類を罪から救うという一大計画を遂行できたということです。自分に不当とおもわれる苦しみの場合、当座はわからなくても背後に理由があるのです。兄弟に捨てられ、冤罪で牢につながれるなど波乱万丈の生涯のなかでヨセフは、「なぜ自分だけこんな目にあうのか」という思いをつのらせていたに違いありません。しかし彼は信仰を捨てませんでした。そのあと不思議なめぐりあわせと出来事がかさなりエジプトの支配者という重責を負わされて、はじめて彼は神の計画が背後にあったことがわかるのです。たとえ神が沈黙していても、いまの苦しみを耐えつつけていくものには必ず「神が益としてくださるもの」があることを聖書は繰り返して教えてくれています。久子の病気は現実的な苦しみです。しかしこの事からも神が愛に根ざした「なにか良いもの」が生みだされていくことを信じ期待したいと思っています。

初代の教会で指導的な地位にあったヤコブ(イエスの弟と推測されている)が世界各地に散らばっていったクリスチャンを励ますために書いた手紙の一部です。

< 私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。信仰がためされると忍耐が生じるということ、あなたがたは知っているからです。その忍耐を完全に働かせなさい。ヤコブの手紙 1章2 - 4節 >

自分自身、肉体にとげ(持病は不明)を与えられながら、あらゆる迫害に耐えて異教徒に伝道したパウロの言葉です。

< 神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。ローマ人への手紙 8章28節 >

H C J B 日本語放送担当

在 主 尾 崎 一 夫 久 子

このメールマガジンは、H C J B 日本語放送の管理するメール・リストに登録されている方に無料でお送りしています。

このメールマガジンをご覧になってのご感想やご意見、ご要望などは、[H C J B 日本語放送](#)までお送りください。

また、このメールマガジンの配信停止、配信先変更、あるいは新規ご登録は、下の該当ボタンを選択し、必要事項をご記入の上、[この内容で送信する] ボタンをクリックして、手続きをお願いします。なお、**Netscape 6.2以降をお使いの場合、このメールマガジンに埋め込まれているご登録手続きの機能はご利用いただけません。**ご面倒ですが、[H C J B 日本語放送](#)まで別途メールにてお知らせください。

配信の停止 (**重要:必ず現在メールマガジンの配信登録されているメールアドレスからご送信ください。**)

配信変更先のメールアドレス
(**重要:必ず現在メールマガジンの配信登録されているメールアドレスからご送信ください。**)

新規登録するメールアドレス

お送りいただいた内容はメールリスト・サーバにより自動的に処理しますので、余分な内容は一切入れないでください。
このメールマガジンはコンテンツが大きいため、携帯電話への配信はできません。



Copyright © 2003 by HCJB. All rights reserved.

日本語ホームページ: <http://www.hcjb.org/japanese/>

Eメール: kozaki@hcjb.org

郵便の宛先:

Mr. & Mrs. Kazuo Ozaki

1920 Berkshire Pl., Wheaton, IL 60187-8050, U. S. A.
